



入場無料

昆虫のふしぎ

ものまねをするおもしろい昆虫や香川の昆虫を展示します。



期間 7月23日(水)～9月20日(土)

時間 午前10時～午後4時

休館 日・月曜日 9月14日(日)・15日(月)は特別開館
8月10日(日)～18日(月)

主催／香川大学博物館・共催／香川大学農学部

お問い合わせ 香川大学博物館

《住所》〒760-8521 高松市幸町1-1
《URL》<http://www.museum.kagawa-u.ac.jp/>
《TEL/FAX》(087)832-1300
《E-mail》museum@ao.kagawa-u.ac.jp

交通案内

※ 駐車場がありませんので、できるだけ公共交通機関をご利用下さい。

● JR 高松駅から

徒歩30分（駅前広場地下にレンタサイクルあり）
ことでんバス【13】弓弦羽・【15】香西車庫「宮脇町」下車 徒歩5～6分
【11】弓弦羽(昭和町経由)「幸町」下車 徒歩2～3分

● JR 昭和町駅から

徒歩5～6分

● ことでん 瓦町駅から

徒歩20分（駅地下にレンタサイクルあり）
ことでんバス【23】弓弦羽「宮脇町」下車 徒歩5～6分



特別展示
大屋 崇博士の
トリバネアゲハ
コレクション

● アクセスマップ



● 香川大学教育学部・構内



公開講座

「モノ」の見方 ～研究はじめての第一歩～

一つの昆虫標本、一つの土器、一つの岩石。
そういった「何気ないもの」も、
見方を変えると、世界の見え方がずいぶん変わります。

期 間：7月23日(水)・24日(木)・25日(金)
午前10時～11時30分

定 員：20名 (小学3年～6年生)

受講料：2,000円

申込み：先着順…香川大学生涯学習教育研究センター

TEL：(087)832-1273

1 戦後間もなく岩田久二雄博士がみた香川県の昆虫

岩田久二雄博士（1905-1994）は、単独性カリバチ類の比較習性学研究と様々なハチ類の繁殖習性の研究にとりくみ、その成果をまとめた大著「本能の進化－ハチの比較習性学的研究」や多くの著作で知られる世界的に著名な昆虫学者です。岩田先生は、戦後間もなく農学部の前身である香川県立農業専門学校昆虫学研究室教授として赴任し、わずか2年間でしたが、香川県三木町を中心に精力的に様々な昆虫の生態を研究し、多数の論文を発表しました。岩田先生が三木町で観察した昆虫を紹介します。



ハッコウバチ

2 香川県のアリ

アリ類は、陸上で最も繁栄した動物のひとつで、極域を除くどこにもたくさん生息しています。そのため、多様な生物に様々な影響をおよぼしており、「地球はアリの惑星」とよばれるほど重要な役割をになっています。また、種類数も意外と多く、日本には約270種のアリが生息しており、その形や生態も様々です。農学部昆虫学研究室では、これまでに様々なアリの生態や行動を研究するとともに、香川県のアリ相を明らかにしてきました。これまでに香川県から記録されている87種のアリを紹介します。



オオノコギリハリアリ

3 三木町白山のチョウ

近年、里山に生息していた生物が最近では姿を見せなくなったことが多数報告されています。しかし、里山には、そもそも珍奇な種類は生息していないので、過去に十分な調査がなされた例は少なく、里山の生物相の変遷を知ることは困難です。香川県三木町白山は、農学部の学生サークルである自然科学部が1968年に「香川生物（香川生物学会）」に、「三木町白山の蝶類」と題して、それまでに白山で採集されたチョウのリストを報告しており、過去と現在の昆虫相を比較することができる貴重な場所です。農学部昆虫学研究室は、2006年に白山のチョウを調べました。過去の報告と比較し、白山のチョウ相の変化を紹介します。



ヒメダシチョウ

4 日本で栽培されるオリーブの宿敵・オリーブアナアキゾウムシ

県花・県木に指定されて保護・育成されているオリーブが香川県に導入されたのは、ちょうど100年前、1908年（明治41年）のことでした。油脂の国内自給を目指してアメリカから輸入された苗木の栽培試験が小豆島で成功したのがその発端でした。導入直後からオリーブ栽培の最大の障壁となったのがオリーブアナアキゾウムシで、このゾウムシの防除を行わなければ成木でも数年で枯死してしまうため、粘り強く継続的な防除が必要となります。殺虫剤の散布を最小限にするために、成虫の潜伏場所である根元周辺を裸地状態にしておくのが発生を抑制するために有効であることが農学部昆虫学研究室と香川県農業試験場小豆分場の共同研究で明らかになってきました。



オリーブアナアキゾウムシ

5 クヌギなどの樹液をめぐる昆虫類

森林地域のなかで、伝統的に日常利用してきた山野とその周辺の田畑などを含めた地域を里山と呼んでいます。香川県は森林地域に占める里山の割合（約80%）が全国でもっとも高い県です。このような里山はあまりにも身近でありふれた環境であったため、学問の対象として研究されることはまれでした。このため、そこに住む動植物やそれらの相互関係についてはいまだに不明な部分が多く残されています。クヌギなどの樹液をめぐる昆虫類の相互関係もその一つです。近年、この問題に取り組み始めた農学部昆虫学研究室では既にダニとカメムシの新種を発見し、多くの稀少種が樹液に関わった生活を送っていることを記録しています。



オオスズメバチ

6 昆虫のふしぎ

(1) 性的二型と性淘汰

昆虫のなかには雄と雌で色や形が大きく異なるものがあり性的二型と呼んでいます。たとえばニューギニア産のトリバネアゲハの雄は金緑色で美しいのですが、雌は褐色で地味な色合いです。またカブトムシの雄には立派な角があるのに、雌にはありません。これら雄だけがもつ特徴は、強い雄や美しい雄ほど多くの雌と交尾できるためであると考えられています。このように雄が多くの雌を獲得するために、美しさや強さを高めるように競いながら進化するという考えを性淘汰と呼んでいます。進化論・自然淘汰で有名なチャールズ・ダーウィンが提唱しました。

(2) 擬態

昆虫のなかには体の形、色や模様を樹皮や木の葉などに似せて天敵から身を隠すものがあります。これを隠蔽的擬態（保護色）といいます。また幼虫期に有毒な物質を含む植物を食べている種は成虫になっても体内にその毒をもち、天敵の鳥などが捕食するとまず吐きだしてしまうものがあります。このような種は鮮やかで派手な色彩をしていることが多いです。これは天敵が色の鮮やかさとまずさに関連づけて学習するため、その種を襲わなくなる効果があります。このような色彩やデザインを警告色と呼びます。また有毒で警告色

を持つ昆虫に、無毒な昆虫が姿を似せて、天敵の誤認によって身を守る方法を標識的擬態と呼びます。

(3) ふしぎな形・美しい色

世界の昆虫には何でこんな形をしているのだろう、どうしてこんなにきれいなのだろうと思わせるものがたくさんいます。擬態や警告色で説明がつくものも多いのですが、なかにはまだ説明のつかないものもたくさんいます。昆虫の形と色の不思議を見ていただきます。

(4) 個体変異・地理的変異・種分化へ

われわれ人間の顔が一人一人異なるように、一見どれも同じに見える同種の昆虫のなかにもさまざまな違い（個体変異）がみられます。同じ生息場所にすむ個体間の変異ばかりでなく、同じ種でも違う地域に住んでいるもの間の違い（地理的変異）があります。さらにこのような変異が拡大していくと別の種へと進化（種分化）が起こります。この展示では個体変異や地理的変異の大きな昆虫を見くらべながら新たな種が生まれる過程を考えます。



コウノトリバネアゲハ

7 特別展示 大屋 崇博士のトリバネアゲハコレクション

三豊総合病院（香川県観音寺市）の元副院長である大屋崇博士は心臓外科医としても著名な方ですが、同時にニューギニアを中心に分布する世界最大・最美の蝶類であるトリバネアゲハ類の研究者・収集家としても世界的に知られています。1983年には大著「トリバネアゲハ大図鑑（講談社）」を出版され、その後も精力的に活動されています。今回は大屋先生の特別なご厚意からお借りすることのできた標本を展示します。

